

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

— 御劔家秘録 —
魔斬姫
外伝

綾守竜樹

表紙 / 21のき奈緒



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『御劔家秘録：魔斬姫外伝』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『魔斬姫伝 退魔師たちの淫獄』『魔斬姫伝 2』（キルタイムコミュニケーション・刊）とあわせてお読みいただけます、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



—御劔家秘録—

魔斬姫 外伝

綾守竜樹

表紙 / ここのき奈緒

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

みつるぎしのぶ

御剣 忍

神器省に所属する斬魔刀使い。「風神楽の舞姫」の異名を持つ。理知的な美女。

シャドウ

淫魔。女の精を吸うことを悦びとする。

■ 前書き

— キャラクター紹介 —

● 御劔忍、27歳。貴二級神器省劔課課長。斬魔数歴代3位。5歳にして刀から選ばれた才媛。風神楽の舞姫。いかなるときも沈着冷静、理性的な態度を崩さぬことから、またの名を「不感症の能面」。

● 有能な課長として内外から高い評価を得ていた忍だが、淫魔シャドウの策にはめられて敗北、勇名の代価をカラダで支払わされる。凌辱のさなかに押しこらし続けてきた「牝」の性を覚醒^{サガ}めさせられ、淫魔のセックスフレンドにされてしまう。自らの立場からすれば絶対に許されざる関係なのだが、どうしてもやめられない。

● 戦士の誇りと女の悦び、退魔師の義務と牝の自由。両極のはざままで悩み続ける忍はある日、シャドウから彼のアジトに泊まるよう誘われる。忍は葛藤を抱えつつも、淫魔の誘惑どおり一週間の休暇を取り、想像を絶する淫獄へと足を踏みいれる——。

※

鍛冶研かじとぎとは無事焼き入れが終わって、さらに刀身に生じた曲がりや反り格好が修正された後に、刀匠が自らおこなう研磨のことをいい、別名、鍛冶押しぢとも呼ばれる作業です。「鈴木卓夫『作刀の伝統技法』理工学社、1944年」

※

■ 4月X日（月）晴れ

わたしは第X七代刀首、御劔忍である。わたしも結局、この秘録に筆を走らせる牝になっ
てしまった。

この秘録を手渡され、わが祖の秘密を知らされたのは、いつのことだったろう？ 彼女
たちを「裏切り者」と罵っていたわたしがいま、彼女たちと同じ背信をくり返している。

この秘録は、一種の宿泊記なのだそうだ。ここ淫獄館で体験したことを、できるだけ詳

しく書きのこす。おそらくは、これも「調教」の一つなのだろう。

言葉は、体験を単純化する。

わたしがある体験を「快楽」と記せば、それ以外のいかなる情感も「快楽」にまとめられてしまう。少なくとも、わたしには「快楽」としか思いだせなくなる。わが邦の人々が言葉を「言霊」と呼んで畏れたのは、実に正しい態度だった。

あきらめて、今日の出来事を綴っていこう。

わたしが館の門扉を叩いたのは、午後七時きっかりのことだった。すでに日は沈み、人気がない地はほぼ真つ暗闇になっていた。ただ、なにかの皮肉のように、銀色の満月が美しい姿を見せていた。

あの淫魔、シャドウはいつものように、目立たない背広姿だった。

「……………いらっしやい」

とりたてて特徴のない顔で、うそ臭い笑顔を浮かべていた。

「わかっていてでしょうね、忍さん？ この館で、私と一週間過ごすことが何を意味しているのか……忍さんがこの家を出るとき、どうなっているのか」

「……………」

「覚悟はできている……そう思っただけですか？」

「……………」

「答えられませんか……ふふふ、すばらしい。あなたは本当に素質があります。絵に描いたようなマゾ気質、理想的な奴隷根性の持ち主ですよ」

わたしはやはり、なにも答えられなかった。分厚い青銅扉が閉められ、鍵がおろされた。

このアナクロニズムな洋館、地下一階地上二階の巨大な密室で、わたしはこれから仇敵と過ごすのだ。わたしたち女をよがり狂わせ、自らの家畜に墮とすことしか考えていない淫らな化け物と――。

「さて、忍さん……」

シャドウは燭台に火を灯し、室内をぼんやりと照らした。床には毛長の赤ジュウタンが敷かれ、奥まで伸びていた。

「……服を脱いでください」

いきなり、これだ。わたしは肩を痙攣させて、再び固まった。

「聞こえなかつたんですか、服を脱いでください……ああ、ストッキングとガーターベルトはいいですよ」

倒すべき敵のまえで、自ら裸になる。胸乳を、股間をさらけ出す。

「……………」

鼓動が、喉の底を突きあげる。両手を強く握りしめて、いかに汗ばんでいるかを思い知る。

「……忍さん」少し強い語調になって、「ここにいるのは、私と忍さんだけです」

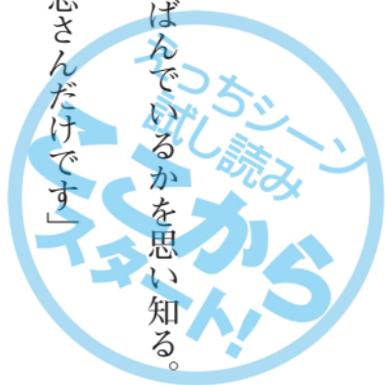
「……………あ」

「忍さんが何をしても、誰も気づきません。誰も忍さんを責めたりしません……」

鼓動が、喉から飛びだしそうになる。耳たぶまで熱くなってくる。

「さあ、欲するままに……内なる牝の求めるままに……」

欲する？ わたしのなかの牝が求めている？ 淫魔のまえで、黒いストッキングだけの姿——いかにも「それ」に臨まんとする女の媚態を示したがっている？



「……ほ、欲してなど……わたし……も、求めている……わけじゃ……」

シャドウは鼻で笑って、

「でしたら、これは命令です」

「……………」

「この淫獄館に入った女は、外での地位、プライド、体裁、すべてを剥ぎとられます。私のまえで、ただの『牝』になるのです」

「……ただの牝……」

「そうです。忍さんは、いやらしい匂いをさせながら歩くオマ×コなんです」

膝が笑いだしている。目が潤み始めたらしく、視界が滲んでよく見えない。

「……そんな……に、匂いなんて……させてい」

「だから仕方ないんです」わたしの反駁に被せるように、「忍さんはここで、私に剥かれるんです。性悪で卑劣な淫魔のせいで、仕方なくいやらしい姿にされてしまうんです」

ロウソクの炎が一瞬伸びた。

「あああ……」

わたしは、震える指先でネクタイを解いた。衣ずれの音に固まったあとは、もう一気だった。神器省の紋入りジャケットを脱ぎ、女課長の代名詞たるタイトスカートを脱ぎ、ワイシャツを捨て、貞操感たつぷりのブラジャーを筆りとる。最後の一枚に手をかけて、動けなくなった。

「……それです」綴りまちがい指摘する教師のように、「もはや逃げ場はないんですよ、忍さん」

「あああ、ああ……！」

わたしは崖から身を投げる気持ちで、ショーツを脱いだ。黒々とした陰毛を飛びださせた。わが一族は割と剛毛で、こまめに手入れしてもすぐ、こんもりとした草叢に育ってしまうのだ。

「今夜はメガネも外しましょうか……靴は、これをどうぞ」

わたしのトレードマーク、銀縁メガネと入れかわりで真っ赤なハイヒールを手渡された。爪先立ちを強いられそうな高さだった。わたしは奇妙な興奮を覚えながら履き、足のライオンをよりいやらしいものに変えた。シャドウがわたしのネクタイを拾いあげ、裸の首に結わえてきた。真っ白い胸の谷間に、赤いタイを通らせた。

「ワンレンの黒髪に赤いネクタイ、黒いストッキングに赤いハイヒール……ふふふ、肌の白さがよくわかります。実によく似合っていますよ、忍さん」

自分がどれだけ異常な格好をしているのか、見なくてもわかった。わたしは早くも呼吸を荒らげ、唇を舐めまわしていた。シャドウがネクタイの端をつかみ、犬の首紐のように引っばってくる。馴れないヒールに膝をガクガクさせながら、わたしは「ご主人様」のあとを追った。

赤いジュウタンは廊下の奥まで続き、つきあたりに大きな錠前つきの金扉があつた。淫魔が押すと、不気味な軋みをあげて開いた。燭台のほのかな灯りが、地下に続く石階段を照らしだした。

シャドウが無言で、闇へのきざしを下り始める。わたしも処刑場に向かう囚人の足取りで続く。狭い通路に靴音が反響する。まわりの空気が濃み、肌寒くなった。

「……さあ、着きました」

終点とおぼしき場所には、異様な粘音が響いていた。生まれたばかりで筋肉の弱い赤ん坊が舌打ちをしているような、硬さや勢いの感じられない音だった。

また、奇妙な汚臭も漂っていた。たとえるならイカの墨とハチミツを混ぜたような、へんに甘ったるい匂いだ。

シャドウは私の訝しげな表情を見、薄く笑いながら照明スイッチらしきものを押した。バチン、と大きな音がして、かなり高い天井から光が降ってきた。

「……………ッ！」

目のまえには、小さなプールがあった。縦横は三メートルくらいで、深さは――。

わからない。

なぜなら、槽のなかには生き物がミツチリ、と詰めこまれていたからだ。赤紫色で、ラグビーボールを半分に分ったような外見で、その身に粘液をまとわりつかせた軟体動物の大群。一時も休まず、その身をくねらせている。疣や皺を蠢かせて、粘っこい摩擦音を立てている。

「……吸精蛭です。これほどの大群をご覧になるのは初めてですか？」

ヒル状の淫魔、すなわち環形門は、もっとも下等な使い魔だ。棘皮門のような運動能力はないし、学習能力もない。彼らは女体にまとわりつき、無抵抗のそれから精を吸いとることしかできない。

「彼らのお相手をお願いします」

わたしはどのような顔を浮かべていたのだろうか？ シヤドウはにこやかに笑って、わたしの背を押した。

「……………ッ！」

ネクタイが宙を舞った。わたしはヒルの沼に突きおとされた。蠢く床が近づいてくる。前受け身の姿勢で倒れこむ。生臭さが目に滲みる。

「彼らには、ここ一カ月ほど餌を与えていません。大歓迎されるはずですよ」

わたしは人外の肉沼に沈められる。重力に引かれた乳房が、粘膜の渦に捉えられる。彼ら独特の肌触り、悪魔の舌に舐めまわされるようなおぞまじさが、胸ぜんたいを包みこむ。

「うあ！ あ、ああ……」

ストッキングよりうえ、生白い太腿も沈まされ、濃いめの陰毛を掻きわけられる。女にとって最も大切な部分を、下等な淫魔のモノにされる。

その部分を守りたくても、手足は底なし沼にハマったときと同様、まわりを掻きまぜることしかできない。わたしはズブズブと沈み続け、ついに背まで浸からされる。頭と尻を出しているだけになる。甘ったるいヌメヌメ感に、みっちりとラッピングされてしまう。

「あああ、ああ……」

ふと背後を見やった。真っ白な尻たぶが、真っ赤な粘膜の海に浮いていた。尻の割れ目や独特の盛りあがり、いやというほど誇張されていた。そのさまは我ながら、いやらし

いものに見えた。女の隠したがるものが、そこに詰まっていそうだった。

「……ああっ？ い、いやあっ！」

わたしを完全に取りこんだとみるや、吸精蛭が蠢き始めた。首筋、胸乳、腋窩、脇腹、背筋、内腿、股間。粘膜に浸かっている部分を、いっせいに擦りたてられる。わたしは子どもの口に放りこまれたミルクキャンディのように、あらゆる方向から舐りまわされる。

「だめっ、そこは……ひいつ、そこもお！」

ラグビーボールの先端が、頸動脈を舐めしごく。楕円の最も太い部分が、腋のしたを磨きたてる。どちらもなくすぐたさの裏に、理性を溶かす淫靡な酸を隠している。ヌメらかながらもザラつく粘膜が、駄目押しとばかりに脇腹や背中を這いまわる。

「ああっ、そこはゆるし……ひいっ！」

股間から会陰部にかけて、数匹のヒルに舐めあげられた。陰毛を引っぱられた。

「遠慮せずに、はしたない声をあげてください」シャドウはワインを褒められたソムリエのような笑顔を浮かべて、「何度でもくり返しますが、ここにいるのは私と忍さんだけなのです……どこまで墮ちてもいいんですよ」

「お、墮ちても……いい……どこまで墮ちても……」

何匹ものヒルたちが、乳房をぐるぐる圍繞してくる。粘液を塗りたくられて膨れあがった胸は、あたかも巨大な口に頬張られているように、付け根から歪められる。舐めながら揉まれ、揉まれながら舐められる。快楽神経を甘やかに麻痺させる刺激は、血の流れに従って胸ぜんたいを犯したのち、トドメとばかり乳頭に集まってくる。

「……あああ、ああ！ ああつ、乳首い……くひいっ！」

硬く尖った突起はヒルたちに挫かれるたび、胸のみならず全身を痙攣させる。乳首ならではの粘っこい電流に鞭打たれて、わたしは囚われの身をくねらせる。自然とわが身を敵の粘膜に擦りつけることになり、足の付け根や肌の裂け目にも悔しい電流を走らされる。

ヒルたちは裂け目を捕らえても擦りあげるばかりで、なかに押しあってこない。でもそれは、彼らが慈悲深いからではない。自分たちがどうすればお腹いっぱいになれるのか、彼らは本能で動いている。

女^{エサ}から精を搾るには、まずその表層を溶かすのだ。この曲面体を覆う毛穴が粘っこい汗を噴きだすようになるまで、ひたすら舐りまわす。そして、体液そのものが発情臭を醸すようになれば――。

「……………うはあつ？ ああつ、くる！ な、なかに入ってくるう！」

吸精蛭がわたしの花びらを搔きわけける。彼らの最大径はかなりあるけれど、そのヌメリと執拗な「愛撫」のせいで、わたしはすんなり飲みこんでしまう。溢れでた恥蜜が、四つん這いの内腿を流れおちていく。わたしは舐られながら押しひろげられ、お為ごかしの滑らかさに騙されつつ陰の襞を引きのばされる。

「あお……………おおお……………奥まで……………あああ、い、いっぱい……………いっぱい……………入ってる……………」

女にとって股間の秘宮を開けられるのは、肉体そのものに乗っ取られるのと同じだ。肉体に乗っ取られれば、精神も奪われてしまう。「カラダとココロは別」などと言ってられるのは、本当の「女」を味わったことのない理屈屋だけだ——たとえば、かつての私のような。

「どうです？ 太くて、硬いけれど弾力たっぷりで、痛みとは無縁の粘膜で……いいでしょう？」

「……うう……うあ、あおお……」

「忍さん……ここでは我慢など無意味ですよ」

カラダを開かれれば、ココロもこじあけられてしまう——。

「……………ああ……………いい……………いい……………」わたしは唾液を垂らしながら、恥知らずにも肯定する。「……………いい……………凄い……………すごく……………いい……………」

「そうでしょう？ 飢えたオマ×コが満たされて」

「……み、満たされて……」下等な淫魔に犯されているのに、「満たされる」などと口走ってしまふ。「……ああつ、た、たまらないっ！」

その瞬間、ヒルたちが名にしおう責めを始めた。「吸精」と付けられている通り、わたしのあらゆる部分を吸いたてた。

「ひいーっ！」

塗りつけられた粘液と一緒に、精を吸いとられる。皮膚を剥がれるような流動感に包まれて、自分が一回り小さくなった気にさせられる。

「す、吸われ……っ！ ふ、深いところ……からあつ！」

わたしは餌にされていることを肉体の芯まで悟らされた。毛穴という毛穴から生理の暴

走を告げる体液が染みだして、わたしの全身は油を塗ったみたいにテカテカになっていた。

「忍さん、ただ喚いていても悦びは高まりませんよ？」シャドウは女の反応を完全に見透かしている男の口調で、「どう鳴けばいいのか、私が教えた……躡けてあげたでしょう？」

「い、いやあ……あ、あれを口にしたら、歯止めが効かなくなる……わたし本当に、どこまでも堕ちちゃう……」

「ふふふ、いまさら何を言っているんです」淫魔の声が、わたしを納得させるための凄みを孕んだ。「この館に来た時点で、他の未来はないんです……御劔忍、あなたは堕ちます」

「ううう……うあつ？ ああつ、そこ！ そこはあ、吸わないで！ チュウチュウしないでえっ！」

「この一週間、忍はひたすらイキまくって、セックスのことしか頭にない牝になるんです」力強い断言だった。「私は必ず、忍をそのような家畜に造りかえます」

「ああ……わ、わたしは、絶対に……そうされてしまうのね……」

「ええ、絶対にです」

逃げられない、仕方がない。仇敵の決めつけに、わたしは狂おしい安堵を覚えた。女の秘奥で暴れる吸精蛭の活躍に、心身を譲りわたした。

弾力たっぷりの軟体生物は、秘唇を押しひろげ仲間を押しつけて、二匹ずつ出入りする。秘穴を射止める競争は激しくて、わたしは数秒を待たずに子宮ごと掻きだされるような交代劇を味わわされる。肉沼に埋もれた爪先を、何度も何度も反りかえらせる。

二匹のうち一匹は、その先端を子宮のなかに伸ばし、鈍感とされる肉壁を舐りまわした。魔性の粘膜は赤ん坊に蹴られても動じない神経群を覚醒めさせ、究極の舐られ感を味わわせてくれた。

「……な、舐められてるう！　こ、こんな奥まで……奥の奥までえ……くひいーっ！」

下っ腹の奥で起きていることなのに、脳裏いっぱい巨舌が映しだされて、わたしを内から溶かしていく。絶対に防げない舐り責めに、わたしは鞭打たれる罪人の挙措をくり返す。

もう一匹のヒルは身を振じらせて、膣穴を押しひろげる。泣きぬれた秘壁をのたうち回らせ、褰という褰を捲りかえして吸精のキスを見舞う。女の中身を吸いとられる刺激は格別で、わたしはその瞬間、指先まで透きとおらされる。

おそらくは、最も隠すべきところから最も大切なものを奪われる無力感——それが魂を凍らせるのだろう。目の奥まで白む凍結から戻るとき、わたしの身には幻惑の温かさとともに、えもいわれぬ絶頂感が訪れる。わたしはあらゆる自制心を振りきって、なりふりかまわず肉を躍らせる。

「……………い……………いく……………」

「ふふふ、忍は言いつけを守るいい牝ですね……………さあ、もっと叫びなさい」

耳たぶ、首筋、腋窩——書きだすだけでも子宮に響く。わたしはありとあらゆるところを舐められ、吸われ、淫魔の餌に貶められた。悔しくて惨めで居たたまれないのに、「仕方がない」を免罪符にして快樂にたゆたった。

「……ううう、吸われていく……ま、またイク……イッちやう……」

「もつとです！ 腹の底から搾りだしなさい」

「……わ、わたしい……忍……」秘奥の主が入れかわった。子宮孔を内から捲られ、小陰唇もムリユツ、とはみ出させられた。「くひいっ！ し、忍イクウツ！」

イクと叫ぶ。

そのときわたしの心を占めるのは、筆舌に尽くしがたい安らかさだ。腹の奥から込みあげる衝動に屈して声帯を震わせるあいだは、御剣家の誇り、退魔師の掟、わたしを縛りつけていたあらゆる枷を忘れられる。

「い、イク、イツちゃう！」わたしはただの御劔忍、いや、一匹の牝として、鼻のしたを伸ばしていれば良い。なんにも気兼ねせず、肉欲のほとばしるままにしていれば良い。「忍、またっ、またイク……ヒルに吸われてイツちゃう！」

「それでいいんです。いやらしい忍がイキまくるのは、仕方のないことなんです」

「し、仕方ない……イクウツ！」

「では、ごゆっくり」

わたしが牝の作法に従ったのを確認すると、シャドウは階段を昇り始めた。

「うあ、あああ……ま、待って！ 忍を……お、置いていくの？」

「朝にはお迎えにあがりますから」

「そ、そんな……あつ、イクツ！」

わたしは早くも連続絶頂に陥り、頭皮から脂汗を垂らした。

「くああ……お願い、休ませて！」

返事はない。かわりに吸精蛭たちが押しよせて、あらゆるところを嬲りまわす。隙あらば秘裂の突入戦に混ざり、だらしなく降りたままの子宮を小突きあげる。解放感は自我を内から蝕むガンになり、わたしは恐怖と安らぎの裏表を往還させられる。

「ま、またイッちゃ……ッ……ああつ、このまま続けられたらあ、おかしくなる！ 忍、狂っちゃう！」

シャドウはわたしを一顧だにせず、靴音は無情に遠ざかっていく。わたしの儂い願いは、扉を開け閉めする軋みで終わる。

「そ、そんな……本当なの！ 忍、本当に……ツク……狂っちゃいそうなのお！」

答えるのは、ヒルたちの蠢く音だけ。外国人の舌打ちみたいな粘音と、子ども用風邪シロップじみた甘ったるい匂いが、わたしの哀願を嘲笑う。

「あああ、あおお！ い、イクツ……忍イクツ！ ……くああ、ああ！ イク……イク、イクウツ！」

それでも赤紫の悪魔たちは止まらない。わたしを氣遣う素振りさえ見せない。ただひたすら突起に吸いつき、裂け目を掻きわけける。彼らの粘膜とわたしのそれを娶わせて、絶頂と引きかえに魂を削りとる。

「あああ！ と、止まって、止めてえ！ 少しでいいからあ、休ませて！ 肌をヌルヌルさせないでえ！」

朝には、と言ったけれど——シャドウはもう来ないのではないだろうか？ わたしはこのまま下等淫魔に吸いつくされて、干からびてしまうのではないか。

わたしは惨めすぎる未来を思いえがいて、何度も気を失った。

「うああ、ああ……もう、もう休ませて……ああ……」

わたしが手足を動かせるようになったのは、何時間後だったのだろうか？ 満腹になった吸精蛭たちが締めつけを解くまでは、どうにもならなかった。精の一滴まで搾られてダシガラと化しながらも、わたしは「少し出たい」という一心でもがいた。比重の重いプールで犬掻きするように、身体を回して石段に手を伸ばした。

ギリギリのところまで届かなかった。

わたしは両目に涙の膜を張りながら、右腕を震わせ続けた。その間も女性器は蹂躪され続け、わたしの背筋は電気を流されているみたいに跳ねた。

あと少し。指先が硬い床、粘膜に沈められているいまは、頼もしく思えて仕方がないそれをつかんだ。わたしは長刀をあつかう握力にものを言わせて、己が身をひきあげた。右の肘まで石床に乗せた。

「……もう少しい……うあつ、はああつ？」

淫魔たちが、それまで手付かずだったお尻に群がってきた。胸よりも量感のある尻たぶを舐り揉み、真っ赤に色づいた谷間を滑りおりてきた。

わたしの谷底は毛深く、強めの陰毛に包まれている。わが一族の遺伝はこんなところも黒くして、肛門の薄茶色を目立たせている——一匹が、その穴に近寄ってきた。

「……い、いやあつ！」自分でもよく見たことのない場所を、悪魔の舌に触られた。「やめて！ いやつ、やめてやめてえっ！」

いまになって気づく。吸精蛭たちに吸われ続けたとき、わたしが願ったのは「休ませて」であって、「やめて」ではなかった。わたしは無意識のうちに、あの嵐のような絶頂を欲していたのだ。少しリフレッシュしてから深くイキたい。わたしのあさましい本心は、いかに上手くイクかを求めていた。

でも、初めてお尻を責められたとき。わたしは明確に拒絶した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>